

一 次の詩を読み、下の問いに答えて感想文を仕上げなさい。(行を答えるときは、上の数字を書きなさい。)

おさない

大木 実

1 おもちや屋の前を通ると
2 毬を買ってね
3 本屋の前を通ると
4 ごほん買ってねと子供は言う
5 あとで買ってあげようね
6 きようはお金をもつて来なかったから
7 私の答もきまっている
8 子供はうなずいてせがみはしない
9 のぞいて通るだけである
10 いつも買って貰えないのを知っているから
11 ゆうがた
12 ゆうげの仕度のできるまで
13 晴れた日は子供の手をひき
14 近くの踏切へ汽車を見にゆく
15 その往きかえり 通りすがりの店をのぞいて
16 私を見あげて 子供は言う
17 毬を買ってね
18 ごほん買ってね

『日本の詩歌』26 中央公論社

(1) a c に、示された字数で、詩の中の語句、表現を書きぬきなさい。文のつながりから、その終わりの音が変わることがあります。

(2) 『 A C に入れるべき行をすべて答えなさい。』

(3) 1 6 に適当なものを入れなさい。ただし、同じものは二度使いません。
ア 楽しみ イ いのり ウ 暮らし
エ 心 オ 経済 カ あこがれ

(4) I II にひらがなを入れて適当な語としなさい。

勤め人だろうか、つましい 1 の中で、子に a (三字) れるままに買ってやる、とはゆかないのだ。

b (十一字) つつ、子は、あのきれいな毬をつきたいな、あの本を開いたらどんなだろう、と子供らしい願いや 2 を口にしてしまう。その I い・・・さが、父には痛いほどであったろう。

おさない子供が、家の 3 を承知しているわけでもない。けれども、子はよくわかつている。父の c (一字) を、『A』と言わねばならない父の思いを。それが、ごまかしや II い・・・れではないことを。

この父と子の、すれちがうのでも、からみ合うのでもない 4 の行き来が、『B』の三行にこもって言いようもなくなかない。子と過ごす、せめての 5 にと、父はよく『C』のだろう。その道すがらまた、子は店先のあれこれに 4 ひかれて、父を見あげる。

詩は、子供の言葉で終わっている。それは、あどけない 6 のように、読む者の内におよんでくる。くりかえし、くりかえし……。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ぼくの手もとに今残っている日記の中で、一番古いものは中学三年生の折につけたものである。もともとあまり日記を書く方ではないのだが、それでも小学生の終り近くや中学にはいった頃は気が向けばなにかそれらしいものは書いていたはずなのに、いつの間にか皆どこになくなってしまった。

①、その古い日記には、一九四七年の七月十四日から八月二十五日にいたる記録が一日一ページずつ小さな字でぎつしりと書きこまれている。

「いよいよ今日から、正式の夏休みだ」という書き出しの一行からもわかるように、これは夏休みの日録なのである。どんな決心のもとに日記をつけはじめようとしたのかは全く憶えていないのだけれど、それが自発的な衝動にもとづくものであったことだけは間違いない。表紙の左上に赤鉛筆で、「秘」と書いた字をマルで囲っていることからそれは明らかだ。

②とはいっても、内容はたわいないことばかりである。友達をさそって多摩川に釣に行き、見まわりの若い男に「カンサツをもっているか」とたずねられ、なかったために一人二円ずつ取られて「入漁証」というカードを渡されたこと。③トマトを食べたとか食べないとかで兄貴と大喧嘩したこと。役場に電球の申込書を出しに行き（戦後まだ二年しかたっていないなかつたあの当時は生活必需品も配給でなければ手にはいかなかった）、ハンを出そうとして勢よく肘を引いた拍子に隣にいたおばあさんの胸を思い切り打ってしまい、おばあさんが唸り声をあげたのでびつくりしたこと。近くの菓子屋で一杯二円五十銭のかき氷をみつけて感激したこと。国語の先生の家へ遊びに行き、同じ番地の同姓の別の家に間違えてはいりこんで「うちにはセンセイなんかないよ」と断られたこと。また、どんなつもりであつたのか、「リーダーズ・ダイジェスト」からのこんな警句が書き抜いてあつたりする。「結婚前にはよく目を開けて、結婚したら半分閉じて。――フランクリン」

そのうち、④「気がつけば 半ばすぎけり 夏休み」という俳句らしきもの。⑤「古い日記は八月二十五日で終っている。これは、夏休みがそこで終了したからではない。次のページには大きな字でこう書かれている。――「以下十五日間、九月十日迄、気管支炎をわずらう。」夏休みが病みやすい時

きものが現れると、後はにわか宿題についての記述が多くなる。それにしても、久しぶりに三十年ほど昔の日記をめぐつてみてまず気づくのは、食べ物についての関心が異常に強く、食糧のみならず衣類などの配給品をしばしば取りに行かれ、夜は停電に苦しめられているといった、⑥あの時代特有の暮しの雰囲気である。

けれど⑦方、食糧難、物資不足で生活が苦しかったとはいえ、当時十五歳の少年であるぼくは意外に毎日を楽しんでいゝ。今から振り返れば、その不思議なアンバランスが⑧。いや、日常生活というものは、どこでも決して苦しさ⑨色や楽しさばかりで成り立つものではない。⑩苦しさや辛さのすぐ横に小さな喜びが隠れていたり、楽しさの裏側に不安がひそんでいたりするのが日常なるものなのだろう。

しかし同時に、その日記に充ちている特別の空気は、なんといっても夏休みによって生み出されたものである。「夏」と「休み」の結合である「夏休み」とは、いわば⑪自由の自乗のような気がしてならない。少年にとつての学校の休みが自由を意味するのはもちろんだが、冬でも春でも秋でもなく、とりわけ夏休みが貴重であるのは、ただそれが長いからというより、夏の季節の休暇であるからだろう。

日記の中でも、よく多摩川に泳ぎに出かけている。知人をたよつて千葉の海へも何日か行つた。自然の中で（温水プールなどではなく）のびのびと泳ぐことが出来るのは夏だけである。大人ほど暑さを苦にしない子供にとっては、なんといつても夏は活動のシーズンなのだ。

考えてみると、子供の頃の思い出は寒い季節のものより夏の体験の方が多きようである。夏には、子供は他の季節の幾倍か深く日々を生きているかもしれない。当然そこには小さな悪事などもふんだんに振り撒かれていることだろう。他の季節に比べて生活全般が活発になるのだとしたら、悪い意志や欲望が育ちがちなものも無理はなからう。そしてそれらの数多い小危機を乗り越え、乗り越えたものを養分として子供達は成育していく。その意味では、夏休みは彼等にとって⑫大切な試験の時でもあるといえ、

よう。

古い日記は八月二十五日で終っている。これは、夏休みがそこで終了したからではない。次のページには大きな字でこう書かれている。――「以下十五日間、九月十日迄、気管支炎をわずらう。」夏休みが病みやすい時

であつたこともまた思い出されてくる。

【注】自乗：2乗のこと。同じ数を二回かけあわせること。

『任意の一点』――一番古い日記―黒井千次 弥生書房

(1) ① ② には、それぞれの語が適当ですか。

ア まして イ もしろ ウ むしろ エ いわんや オ もっとも カ ところで

(2) ③ 「とはいっても」とは、どういうことですか。

ア 夏休みの日録ではあつても イ どんな決心から日記をつけはじめたのかは憶えていないとはいっても
ウ 自発的な衝動にもとづくとはいっても エ 「秘」と書いた字をマルで囲っているとはいっても

(3) ④ の一因ともなっている、この時代を語る文中の一語を書きぬきなさい。

⑤ からわかる「ぼく」が直面していることを、示されている字数内で答えなさい。（文中の語を用いてかまいません。）

(二) 字 が (五) 字 る

(5) ⑥ 「あの時代」とはいつのことですか。「時」につながるように、十六字で書きぬきなさい。

(6) ⑦ (二か所) に共通する漢字一字を入れなさい。

(7) ⑧ にはどれが適当ですか。

ア 悲しい イ 面白い ウ 情けない エ 恐ろしい オ はずかしい

(8) ⑨ に「自由の自乗」とありますが、その(値)としての一文を探し、はじめの五字を書きぬきなさい。

(9) ⑩ 「大切な試験の時」とありますが、筆者はどのように夏休みを振り返っていますか。

ア 苦しい生活の中で、小さな喜びを必死に探していた時 イ 他の休みよりも長く、自然の中でのびのびとできた時
ウ 悪事や危機さえも、その成長の助けとなっていた時 エ 楽しんだ挙げ句の入院を物語る空白の日記がづらい時

I サンドヒル雄ジカの妻は、しずかに雪の中に横たわっていた。二人がその場を引き上げる時、近くには、生き物の姿もなかった。ただ、むこうの丘のあたりに、大きな雄ジカが、角をふりたててさまよっているばかりだった。

一時間ほどして、猟師たちは、そりをひいてもどつてきた。雌ジカの死骸を、血に染まった雪から引き上げるためだ。すると、死骸のまわりには、大きな新しい足あとがついていた。

④ かげのようなものが、白い雪の丘をこえて、くらやみに消えていくのが見えた。

その夜、ヤンはキャンブの火をながめながら、暗い思いにしずんだ。心の中で、人間らしい気持ち、がつがつした⑤のような気持ちを、はげしくのしつた。

(つまり、こういうことだったのか。これがほんとの狩りというものなのか。何週間も何週間も、一つの目的だけを思いつめて、⑥数えきれないほどの、ゆかいな失敗をくりかえしたあげく、たどりついた成功というのが、こんないやらしいことだったのか——うつくしい気高い生き物が、さんざん苦しめられて、はじめな、くされ肉のかたまりになってしまふとは。)

しかし、朝がくると、ゆうべの暗い思いはうすれていた。

村へもどる猟師たちと別れ、一人サンドヒル雄ジカを追いつづけて三日、ヤンは足あとを手がかりに、森の出口で待ちぶせていた。

II

ヤンは心をひきしめ、銃をかまえながら、そろそろ立ちあがった——そのとたん、つい五メートルばかりむこうで、やはり立ちあがったものがあった。青銅と象牙でできたような、すばらしい一對の角、王さまのよ

うに堂々とした頭、その後ろにつづくすばらしいからだ——ヤンは、サンドヒル雄ジカと向き合って立っていたのだ。

とうとう——雄ジカの命は、ヤンの手ににぎられた。しかし、雄ジカはひるまなかつた。じつと立ったまま、あの大きな耳と、かなしげでいつわりのない目とを、こちらに向けていた。

ヤンは、銃をかまえたが、また下へおろした。雄ジカが身動きもせず、静かにヤンの目を見つめていたからだ。ヤンは、かみの毛が逆立っていたのが、おさまるのを感じた。くいしばっていた歯がゆるんだ。また、とびあがろうとするようにかがめられていたヤンのからだも、ゆつたりのびて、人間らしくつつ立った。(撃て、撃て、撃つのは今だ。おまえが骨をおつてきたのは、このためだぞ。)心の中で、かすかにそうささやく声があったが、その声も消えてしまった。

ヤンはあの夜のことを思いだした。あのときは、ヤン自身が追いつめられて、狩り手のオオカミどもと、顔をつきあわせたのだ。それからまた、もう一つの夜のことも思いだした。あのとき、雪はころされた雌ジカの血で赤く染まったのだ。そして今、自分と雄ジカの間、雌ジカが苦しみながら死んでいく姿が、まぼろしのようにうかんだ。その大きなかなしげな目は、こう問いかけているようだった。

「わたしが、どんな悪いことをあなたにしたというの。」

ヤンの気持ちは変わった。雄ジカと目を向き合っているうちに——そして、心を向き合っているうちに——⑦雄ジカを殺そうという気持ちは、あとかたもなくなった。

⑧雄ジカの目を見つめていることも、その命をうばうこともできなかつた。⑨雄ジカに対してもついていた考えが、まるで変わった。⑩その新しい考えは、前から少しずつ心にめざめていたのだが、それが今こそ、はっきりめざめたのだ。

ヤンは、心にさげんだ。

(ああ、おまえはなんとうつくしい生き物だろう。あるかしこい人間が、

てやれさえすれば、おまえは、何の害もうけないだろうに。

さあ、いけ。こわがることはない。松林の丘をこえていくがいい。ぼくはこれまで、オオカミのようなあらあらしい心で、おまえのあとを追ってきたが、もう二度と⑪そんなことはしないだろう。ぼくはこれまで、おまえの仲間を、動物的か、肉のかたまりかだとばかり見ていたが、これから、⑫そういう見方はしなくなるだろう。

ぼくは、おまえより年上で、おまえの知らないいろんなことを知っているが、おまえはまた、不思議な力を持っていて、われわれ人間にはわからないことを、感じる事ができる。さあ、いけ。ぼくをこわがることはない。

ぼくは、もうおまえに会えないかもしれない。だが、もし、おまえが時々やってきて、ぼくの目を見つめ、ぼくを今日みたいな気持ちにさせてくれさえすれば、ぼくの心からは、⑬のようなあらあらしいさが、すつかり追いだされてしまうだろう。だが、もうおまえに会うことはないだろう。元気でいくがいい。)

『シートン動物記』—サンドヒル雄ジカの足あと—

アーネスト・トムソン・シートン 阿部知二訳 講談社青い鳥文庫

「からだは、心の⑭だ。」といっている。だとすると、おまえの心はおまえのからだのようにうつくしいのか——うつくしくてかしこいのか。ぼくらは、長いことおたがい敵だった。猟師と獲物だった。だが、もうそんなことはない。ぼくらは、顔を向き合せて立っている。おたがいに生き物として見つめあっている。おたがいにことはわからない——だが、なにを考え、なにを感じているかはわかる。今こそぼくは、これまでになかったほど、おまえのことがよくわかる。おまえだって、ぼくのことをわかるだろう。なぜって、おまえの命は、とうにぼくの手になぎられていたのに、おまえは、ちつともこわがっていないじゃないか。

ぼくは、あるシカの話を知っている。そのシカは、猟犬に追いつめられたすえ、猟師に助けを求めた。そしてかれは、シカを助けたのだ——おまえもぼくに追いつめられた。そして、思いきって、ぼくに助けを求めたのだ。

そうだとも。おまえはうつくしい。そしてまたかしこい。なぜって、ぼくは、おまえの毛一本でも、損なうつもりはないが、おまえはそのことを知っているのだ。ぼくらは兄弟だ。おまえはすばらしい角をもつ弟だ。ぼくのほうが年上でつよいだけだ。もし、ぼくの力で、いつもおまえを守つ

(1) — ①からは、何のどのような行動、様子が読み取れますか。それまでの動きとあわせて、三十〜三十五字で説明しなさい。

(2) — ③ (I)とII各一か所)に、ひらがな三字の語を考えて入れなさい。

(3) — ③について、①②に答えなさい。

① これは何のことをいっていますか。

ア 狩りの孤独 イ 狩りの苦労 ウ 狩りの恐ろしさ エ 狩りのむごさ

② ①をIIでは慣用句で表現しています。七字で書きぬきなさい。

(4) — ①のようなヤンの変化を、具体的に描いている段落はどこですか。はじめの五字を書きぬきなさい。

(5) ヤンが、 — ⑤のようであったのはなぜですか。次の①③に答えて、後の説明を仕上げなさい。

① a に、示された字数のひらがなで、文中の語を書きぬきなさい。

② ヤンは雄ジカの目をどのように感じたのですか。 b に過不足なく、文中の表現を書きぬきなさい。

③ c には、次のどれが適当ですか。

ア 通じることばはないが、あるがままに自分をゆだねよう
イ 銃という絶対的な力を持つ者に、なんとか見逃してもらおう
ウ 同じ生き物として、これからは助けあって生きてゆこう
エ おたがい敵同士であったが、今回は自分の負けであろう

自分の命をにぎっているヤンに対して a (三字) ず、静かに b 目を向ける雄ジカは、
c とするかしこさ、うつくしさに満ちていたから。

(6) — ⑤の考えでは、雄ジカはどういうものであったのですか。「敵」「獲物」の他に二つ、 — ⑥の後から書きぬきなさい。

(7) — ⑥「新しい考え」はどのようなのですか。

ア 人間のおよばぬ不思議な力を持つ存在として、おそれをおぼえる
イ 猟師たちのいう「ほんとの狩り」の意味がわかった気がする

ウ その根本において、たがいにわかり合える生き物としてみとめる
エ 相手を追いつめてゆくおもしろさよりも、つらさを感じはじめる

(8) — ⑧には次のどれが適当ですか。

ア みなもと イ まぼろし ウ みがわり エ あらわれ

(9) 次のア〜オの文は、シカを追い続けたヤンが直面したことや、その思いを語るものです。 — ①「そんなこと」「そういう見方」と同種のものを全て
選びなさい。

ア たかがシカに見られただけでふるえるなんてと、ヤンは、自分の心のひるみをあざけた。

イ 知恵くらべ、力くらべだ。むこうの速さが勝つか、こっちの銃が勝つかだ。

ウ にげてくれてよかった。あいつらは今日、これまでだれも見たことがないようなものを、見せてくれたんだ。

エ 吹きつける雪はシカの味方で、ヤンの敵だった。

オ このすばらしい雄ジカが、なんにも気づかずに休んでいるところを撃つなどというのは、考えるだけでおそろしい罪のように思えた。

四 次の文章は、灰谷健次郎の『天の瞳』^{ひとみ} 少年編の一場面です。(途中、省略があります。) 中学一年の国語担当、宮原先生(通称「ナンデスネ」)^{とちゅう}が、山之口獺の詩を取り上げて授業をしています。後の問いに答えなさい。

「きみ。下駄好きですか」
ナンデスネは、ミツルにたずねた。

「ええ。好きですよ」
とミツルは答えた。

「そいじゃ、あなた、そのオ、なんですねえ。下駄をはいた気分になってですね。『ミミコの独立』を読んでください」
「はい」

ミツルは立って、山之口獺の詩を読んだ。

I

とうちゃんのげたなんか
はくんじゃないぞ
ぼくはその場を見て言ったが
とうちゃんのなんか
はかないよ
とうちゃんのかんこをかりてつて
ミミコのかんこ
はくんだ と言うのだ
こんな理屈をこねてみせながら
ミミコは小さなそのあんよで
まな板みたいなげたをひきずって行った
土間では片すみの
かますの上に
赤い鼻緒の
赤いかんこが
かぼちゃと並んで待っていた

【語注】

かんこ…下駄をいう幼児語。

かます…穀物や石

炭などを入
れるむしろ
の袋。

ナンデスネは

「や、どうも、ありがとう」
といった。

「詩はイメージですね。a 言葉はなに一つ使っていませんが、A②浮かび上がるイメージはすごいですね。そのオ、なんですね。そのオ、色彩感覚ちゅうのも、そのオ、なんですねえ。もうお見事、B①コウサンというしかない。B 山之口獺、ぼく好きなんです。えー、えー」
なんだか、こつちまで山之口獺が大好きだったように思えてくるようなナンデスネのセリフと B② なのである。

「どうですか。きみ、この詩を読んでなにか感じましたか」
タケやんが指名された。

「ミミコちゃんがかわいいやん。オレの妹といっしょ」
「きみの妹はミミコのような子どもですか」

「そう。小さな子はなんでも自分でやりたがる。独りでやることにあこがれてるねん」
「独りでやることにあこがれる…うーん、なんですねえ。きみは、いい表現するねえ」
タケやんは授業でほめられることは、まずない。
タケやん、少々照れた。

ナンデスネは、『ミミコの独立』を、もう一度、生徒たちに読ませた。

「山之口獺さんは、どうして、この b 情景をうたった詩に、『ミミコの独立』という、そのオ、なんですねえ、独立なんて、c イメージを持つ言葉をわざわざ使ってタイトルにしたんでしょね」

何人かの生徒が手を挙げた。一人の女生徒を指名した。

「この作者は、子どものかわいさも大切にしながら、そのことよりも、もっと大切な、人の力を借りないで、なんでも自分でやってみようとする子どもの独立心をととても大事にした」

「その通りですね、その通りですね」

すぐ、また手が挙がる。

「とうちゃんの下駄を借りて、はいているのに、とうちゃんのなんかはかないよ、というところに、ミミコの d 気持がある」

「そうですね、そうですね」

タケやんがたずねた。

「ミミコって誰？」

「娘です。山之口獺さんの。正しい名は泉^{いずみ}なんです。なぜ、ミミコと呼ぶようになったかというわけを、獺さんは詩の中に、つぎのように書いています」

ナンデスネは、持ってきていた数冊の本と印刷物の中から、一つを抜き出した。

たくさんの資料を用意し、持ってきていた。

II

隣り近所はこの子のことと呼んで
いずみこちゃんだの
いみこちゃんだの
いみちゃんだのと来てしまつて
泉にその名を問えばその泉が
すまし顔して
ミミコと答えるのだ

①生徒たちの顔がほころんだ。

(1) a s dに最も適当なものを入れなさい。

ア かわいい イ いかめしい ウ むずかしい エ つよい オ まぎらわしい カ おもたい

(2) 詩Ⅰの④①の部分について、「待っていた」から、――④②「浮かび上がるイメージ」とはどのようなものですか。

ア 赤いかんこが、とうちゃんに意地を張っているミミコを見ている。「またか」とイライラしつつも、隣りのかぼちゃとじつと見守っている
イ とうちゃんに、生活を背負った苦勞を感じる。それに対して、かんことかぼちゃが、別世界にでもあるかのようにほのぼのと華やいてい
ウ 赤いかんこは、履いてもらえず寂しい思いをしていた。それで、かぼちゃと一緒に、ミミコを、「早く早く」と応援しながらせかしている
エ ミミコが赤いかんこと出会った時のうれしそうな表情が目につかぶ。そのお似合いの様子をとうちゃんもかぼちゃもやさしく見ている

(3) ⑤にあるような、ナンデスネ先生の、詩人「山之口貌」への思いについて、次の①～③に答えなさい。

① ⑤①「コウサン」を漢字に直しなさい。

② ⑤②には、どれが適当ですか。

ア 知識 イ 感想 ウ 情熱 エ 疑問 オ 興奮

③ 先生は、自分の好きな詩人について、生徒に伝えようとしています。その姿勢が最もよくわかる一文のはじめと終わりの三字を書きぬきなさい。

(4) ⑤③のようであるタケヤンについて、Ⅰの詩と合わせて考え、次の①～③に答えなさい。(①②は、下のア～オから選びなさい。)

① タケヤンは、この詩の情景を、誰と同じ気持ちで見えていますか。

② この時、タケヤンの心の中にあつたのは誰ですか。

③ タケヤンがこの詩から受け取っていたものとして、当てはまらないものはどれですか。

ア とうちゃんの下駄を履きながらも、自分のかんこを履くためだから履いていないと、変な理屈をこねているミミコがおもしろい
イ 自分の下駄を履くだけに、「ミミコのかんこはくんだ」と父親に向かって宣言する様子に、小さなたくましさを感じる
ウ 口では一丁前のことを言いつつも、小さな足であぶなつかしく、とうちゃんの大きな下駄をひきずっていく姿がいとおしくなる
エ 子どもが成長をし、自分の力でいつか目の届かない遠くまで行ってしまいうことを予感し、うれしくもあるが、少しさびしい気がする

(5) ⑤④、Ⅱの詩を読んで、「生徒たちの顔がほころんだ」のはなぜですか。

ア なぜ「泉」を「ミミコ」というのがわかり、クラス全体がさらに山之口貌への関心を持ったから
イ ちよつと気取って答えたミミコの姿を想像して、クラス全体にやわらかな温かい空気が流れたから
ウ 有名な詩人であるのに自分の娘の呼び名にこだわらないところを、クラス全体が意外に思ったから
エ 幼くてもしっかりと自分の意志をつらぬくことができるミミコに、クラス全体がほこりを感じたから

氏 名

受験番号

- ・記号のついているものはすべて記号で書きいれなさい。
- ・句読点や「 」も一字とします。

(1)														
a			b						c					
(2)						(3)								
A			B			C			1	2	3	4	5	6
(4)														
I						II								
い			さ	い										れ

(1)		(2)	(3)			(4)					
①	②										
(5)										(6)	(7)
										時	
(8)				(9)							

(1)													
(2)		(3)											
		①	②										
(4)				(5)									
				①	②						③		
(6)				(7)	(8)	(9)							

(1)				(2)	(3)							
a	b	c	d		①		②	③				
(4)				(5)								
①	②	③										

合
計